

審査結果の要旨

報告番号	甲 第 1249 号	氏名	松原 庸勝
審査担当者	主査 白濱 正博 (印) 副主査 萩原 浩 (印) 副主査 山本 宏一 (印)		
主論文題目： Clinical outcomes of percutaneous suction aspiration and drainage for the treatment of infective spondylodiscitis with paravertebral or epidural abscess (硬膜外膿瘍または傍椎体膿瘍を伴った化膿性脊椎炎に対する経皮的病巣搔爬ドレナージ術の治療成績)			

審査結果の要旨 (意見)

高齢者の増加に伴い化膿性脊椎炎も増加してきている。感染に対しては病巣の徹底的な搔爬と局所の安定性が要求されるが、全身状態や合併症を考慮すると侵襲の大きな手術は困難なことも多い。この経皮的病巣搔爬ドレナージ (PSAD) は侵襲も少ないため、急性期の初期治療から硬膜外膿瘍や傍椎体膿瘍を伴う進行例まで行う初期治療として非常に有効な手術手技と思われる。実際の臨床例でも十分な治療成績が得られ、大きな合併症も見られていない。世界的にみても同様の手術手技の報告は少なく、オリジナル性があり良好な成績が得られているため、学位論文として十分値する論文と思われる。

論文要旨

我々はこれまで病期初期の化膿性脊椎炎に対して低侵襲手術である経皮的病巣搔爬ドレナージ (PSAD) 行い、良好な治療成績を報告してきた。近年では硬膜外膿瘍や傍椎体膿瘍を伴う進行例にも適応を拡大しており、治療成績及び成績不良因子について検討を加えた。1997年2月1日から2014年12月31日までの間に化膿性脊椎炎の進行例に対し当院でPSADを施行した52例を後ろ向きに調査した。Primary outcomeを最終診察時の臨床所見とし、modified MacNab criteriaを用いて評価した。さらに臨床所見でexcellent、goodを成績良好群、fair、poorを成績不良群に分類して2群間で統計学的解析を行い、成績不良因子を調査した。臨床成績はexcellent14例、good22例、fair2例、poor14例であり、成績良好群が36例、成績不良群が16例であった。単変量解析では耐性菌感染、免疫抑制剤使用の割合が有意に高く、ロジスティック回帰分析の結果、成績不良群では耐性菌感染の割合が有意に多かった ($P < 0.01$)。化膿性脊椎炎の進行例に対してPSADは約70%の割合で有効であり、成績不良因子は耐性菌感染であった。